

春風秋霜

2月号

平成31年2月4日
島田市教育委員会だより
教育長 濱田和彦

春風をもって人に接し、秋霜をもって自らを慎む 佐藤一育

1 授業改革について

先日、静岡教弘の教育研究実践論文の受賞者が発表されました。(静岡教弘だより No133) その中に以前一緒に勤務したことのある方が、優秀賞を受賞していました。私が彼と最初に会ったのは、大学院を卒業したばかりで美術の講師をしていたときでした。彼は、子供の思いを大切にすることや、より良い作品を完成させようとする思いが強いものの、指導計画はいつも時間不足になるという課題をもっていました。

しかし、教材研究は大変熱心で、導入時の子供に提示する作品は、いつも工夫していました。また、子供の作品をよりよく見せるために、絵画作品の台紙の色にもこだわるなど、子供への愛情や指導への情熱を感じさせる方でした。

更に、自分の専門である木彫の作品作りにも打ち込むなど、自分の技能の向上にも努めていました。その作品が互助新聞の表紙を飾ったこともあります。

最初の出会いからすでに15年も経っていますから、様々な経験と努力が今回の受賞に繋がっていると思います。彼を知っている元校長先生とこの話をすると、最初の一言は、「信じられない」でしたが、大変喜んでくれました。彼の受賞を通し、教員は自分のライフステージに合わせ、成長していかななくてはならないと思いました。

2 校長面談から

学校評価において「学校は信頼できる」と97%の保護者が答えた学校がありました。私の教員生活の中では経験のない数字です。保護者から信頼されるということは、いじめや不登校などがなく、学力も安定しているからでしょう。

また、「授業が分かる」「学校が楽しい」などの項目に、子供たちの評価が90%以上の学校も沢山ありました。これらの数字からも、島田市の学校が大変安定していることが分かり、大変ありがたいことだと思っています。

教育は、知識を定着させるだけが目的ではありません。「未来に生きる子供たちのために」という視点で、子供たちを育てなくてはなりません。2060年には今ある職業の60%がAIやロボットに変わっているという話も聞きます。変化の激しい社会を生き抜く力を育てるということを、教職員だけでなく保護者や地域とも共有しなくてはならないと思います。

子供たちが、誰ともコミュニケーションが取れる、切磋琢磨する、失敗を乗り越える、新しいことに挑戦することができるためには、このような力が育つ場を創り、必要な負荷をかけなくてはなりません。負荷は時として苦痛を伴いますが、それを乗り越えることのできる子供こそ、これからの社会を生きぬく力を身につけた子供だと思っています。必要な負荷を与えるということを、教育課程の編成にも生かして頂きたいと思っています。

3 成人式を終えて

今年の成人式は、離席したり、成人代表の挨拶中に大きな声をあげたりした成人はいたものの、式を妨害するような動きは見られませんでした。これは、成人と関係のあった方々が、お酒や旗竿などを会場入り口で預かることができたからです。成人が恩師と穏やかな雰囲気の中で関わることはできたのは、当時の繋がりがあったからだだと思います。協力して頂いた先生方

には感謝申し上げます。

式後のアンケートでは、ハレルヤさんの三味線演奏や恩師との交流にも高い評価を頂きました。参加して頂いた校長先生他旧担任の皆様方には、心から感謝しています。

しかし、式典後の会場の外では、飲酒し酩酊状態になってしまった成人もおり、特にひどい1人を救急搬送しました。私は1人の教え子を急性アルコール中毒で亡くしています。大学の歓迎コンパで飲み過ぎ亡くなりました。雰囲気飲み過ぎることのリスクは大きいことを知ってほしいと思いました。



4 教育論文を読んで

本年度の教育論文は、教科指導だけでなく、特別支援教育・ICT機器の活用などと、多様な実践が寄せられました。中でも、複数学年の生徒を対象にした実践や、複数教科や複数教材をまとめたものなど、時間をかけた実践も見られたことを嬉しく思いました。

また、中学校社会科では、新しい視点で教材を組み直した実践もあり、この挑戦する姿勢には敬意を表すると共に、このような姿勢を今後も大切にして欲しいと思いました。

更に、特別な支援が必要な子供への教育実践が3点もあり、それぞれの実践が子供の表れを丁寧に観察し、確かな観察を基に「できる」を広げています。できることが増えていけば、自己肯定感も高まり、集団への適応も増していきます。現状を良しとするのではなく、子供の可能性を信じて努力する教師の姿勢は、島田市の教育がこれまで大切にしてきた「個に焦点を当てた教育」を正に実践したものであると思いました。

本年度は、若い先生方の応募が中心でしたが、今後は様々な年代の先生方からの応募を期待しています。また、市の教育論文を初めの一步として、様々な教育論文に挑戦し、自分の授業改善や教材開発に繋げていただけたらと願っています。

肘かけ椅子

池谷 英人

学校教育課長

『2月という季節』

2月の歌と言えば、教科書では「早春賦」。作曲者は「夏の思い出」で有名な中田喜直の父親の中田章。喜直が全国の嫌煙運動の先鋒に立った理由は、父が大変な煙草飲みで、肺炎で倒れても煙草を吸い続け45歳で亡くなったからだとも言われています。また「早春賦」は、実に逸話に富んだ曲で、モーツァルト「春への憧れ」の影響だとか、「知床旅情」は「早春賦」の影響だとか言われ、知る人ぞ知る有名な話なのです。

さて、日本の月の異名は「日本書紀」や「万葉集」などで古くから使われてきましたが、この名前には日本独自の文化や人々の感性が込められているように思います。「如月(きさらぎ)」は旧暦2月で、新暦に換算すると2月下旬～3月ころ。意味は、まだまだ寒く「衣更着」とか、春を間近に控え草木が生え始める「生更木」など諸説あるのだそうです。これは、現代の私たちへも「まだまだ寒いので、みなさん風邪(インフルエンザ)に気を付けてネ」ということにも取れます。花粉は辛いですが、暖かい春は待ち遠しいですね。